

SOAS Language Centre
Intermediate Japanese Class Projects 2010-2011

注文の多い料理店 Kevin's version

ここは、山の中です。

若い男が二人、歩いています。鉄砲をもって、白い大きな犬を二匹つれていきます。

二人は、もう何時間も山の中を歩いています。一人が言いました。

「どうしてこの山には動物がいないんだ？鳥もいないし、うさぎもいない。つまらない。」

もう一人が言いました。

「この鉄砲で、鹿をパパーンと撃ちたいなあ。きつと楽しいだろうなあ。」

二人は東京から来たのです。二人は、小さい村にある旅館に泊まっています。

一人が言いました。

「獲物がいないんじゃないか。早く帰って昼食をするか？」

もう一人が言いました。

「それがいいね。じゃあ、帰ろう。」

でも、その二人の若い男は、夕べ東京から来たばかりなので、山の道がよく分かりません。

「あれ！？帰る道が分からないぞ！どうしよ

う。」

もう一人が答えました。

「そうだなあ。ここに二本の小道があるけど、どちらへ行ったら、いいのかなあ。」

二匹の白い大きな犬は、男たちの決断を座って待っています。

一人が言いました。

「ほら、見て。その木に道標があるよ。何か書いてあるけど読める？」

「ええと。『ヤマネコ旅館』って書いてあるよ。」

「なあんだ、僕たちが泊まる旅館じゃないか。よかったなあ。じゃあ、あそこの小道を歩いて行こう。」

二人の若い男がその道を歩いていきます。犬も男たちの前を歩いていきます。

男たちは、歩いている間、こんな会話をしています。

「今日はいい天気だね。」

「そうだね。今年の夏はけっこうあついね。」

「うん。去年の夏よりあついと思わない？」

「うん。地球の温暖化かなあ。」

「そうかもしれないよ。」

そう話していたら、急に強くて寒い風が吹いてきました。木の葉が「かさかさかさ」。

一人が言いました。

「急に寒くなったぞ。へんだなあ。」

もう一人が言いました。

「何か聞こえるか。」

「うん。聞こえる。口笛じゃない？」

「こんな小道を口笛で？ 気味が悪いなあ。早く帰ろう。」

二人の男は、急いで小道を歩いています。

突然、犬が右側にある道を曲がって走り出します。男が犬に大きな声で呼びましたが、犬は、注意を払いません。

「しかたがないなあ。この道を行こう。」

二人の男は犬をつれて小道を歩いています。時間が経って、だんだん暗くなりました。

「今、何時だと思う？」

「わからない。あれ？ へんだなあ。僕のとけいもうない。どこかで落としたかなあ。」

「ホテルはまだ遠いと思う？ 僕、おなかがすいたよ。」

「僕も。」

「ほら！ 見て！ あそこ、うさぎがいるじゃない？」

「ほんとうだ。何で犬たちは追いかけないのか。」

「わからない。とにかく早く追いかけてよう！」

犬たちがうるさく吠える中、男の二人はうさぎを追いかけてますが、つかまえることができません。

「ダメだ。もう帰ろう。」

道で犬が待っています。一匹が男を噛み付き始めます。もう一匹は、「バカな人間だ」と思っているような顔つきで見えています。

「いた〜い！ 何だよう？ やめろ。」噛み付かれた男が言いました。

もう一人の男が「大丈夫だ。ホテルはもうすぐだ。」と言いました。

もう真っ暗になりました。草が「ざわざわざわ」、木の葉が「かさかさかさ」。

一人の男は「あそこ見て。何か見える？」
「うん。見える。鹿じゃない？早くつかまえよう。」

二人の男は鹿を追いかけますが、またつかまえることができせん。やっぱり、鹿ははやすぎました。

すると、突然二人は、ホテルの前に立っていました。犬の二匹も、もうホテルの前で待っています。

「犬は早いね」一人が言いました。「早く入ろう。僕は眠いよ。お風呂にはいりたい。」

しかし、おどろいたことに、ホテルの入り口の前に、大きい犬がいます。

「わ～！びっくりだ！」

大きい犬は、二人に「ここは人間のホテルじゃない。お前たちは外の犬小屋で寝なさい。」と言いました。そして、二匹の犬に「お犬のお客様どうぞ、お入りになってください。おなかがおすきになりましたでしょうか。ぜひ、お食事をめしあがって、ごゆっくりなさってください。」と言いました。

犬はホテルの中に入ります。男の二人はしかたがなく、犬小屋に入ります。

ちらちらと雪が降り始めました。